日田市埋蔵文化財調査報告書第97集

塚原遺跡

塚原遺跡
日田市埋蔵文化財調査報告書第97集
2011年
日田市教育委員会

2011年

日田市教育委員会

序　　文

この報告書は、当委員会が平成20年に分譲地造成工事に伴って発掘調査を行った塚原遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では弥生時代の竪穴住居や小児用甕棺墓などが発見されました。周辺ではこれまでに遺跡の所在が確認されていないため、今回の発見により日田盆地北東部の矮小な沖積地にまで弥生時代の集落遺跡が広がっていたことがわかります。古代日田の歴史を考える意味で貴重な発見です。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

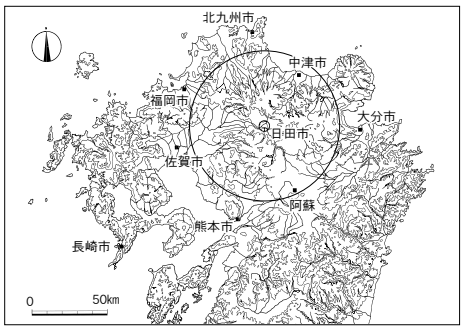
最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成23年２月

日田市教育委員会
教育長　**合原　多賀雄**

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成20年度に実施した「塚原遺跡」の発掘調査報告書である。この一帯は当初「日田条里」の範疇に含まれており、遺跡の時代も古代～中世とされていたため、当初の遺跡名も「日田条里塚原地区」としていた。しかし、今回の調査結果では、古代～中世の遺構は存在せず、かわりに弥生時代の集落の存在が認められたことから、現在の周知遺跡名では誤解が生じるものと判断し、調査終了後の平成20年12月には、遺跡名称を「日田条里」から周辺の小字を採用して「塚原遺跡」へと変更する手続を行った。
2．調査は分譲住宅造成工事に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3．調査現場での実測及び空中写真撮影は株式会社九州文化財総合研究所に委託した成果品を使用し、その他の部分は渡邉が行ったものを使用した。写真撮影は渡邉が行った。
4．本書に掲載した遺物実測・遺物写真撮影は雅企画有限会社に委託した成果品を使用し、そのほかを渡邉が行った。遺構・遺物のレイアウト・製図は渡邉のほか、佐藤久美（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
5．挿図中の方位は全て磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
6．写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
7．出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
8．本書の執筆編集は渡邉が担当した。



日田市の位置

本文目次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録
⑴　調査の概要 …… 3
⑵　遺構と遺物
１．竪穴建物 …… 4
２．甕棺墓 …… 7
３．ピット …… 9
Ⅳ　まとめ …… 10

写真図版目次

図版１　上段　調査地遠景（日田盆地を望む）
下段　調査地遠景（南から）
図版２　上段　調査地全景（真上から）
下段　南側遺構群（真上から）
図版３　①　１号竪穴建物（西から）
②　１号竪穴建物（東から）
③　１号竪穴建物遺物出土状況
④　２号竪穴建物（西から）
⑤　２号竪穴建物（東から）
⑥　１号甕棺墓確認状況
⑦　１号甕棺墓完掘状況
⑧　２号甕棺墓完掘状況
図版４　①　３号甕棺墓完掘状況（東から）
②　３号甕棺墓完掘状況（南から）
③　10号ピット（東から）
出土遺物
図版５　出土遺物

挿図目次

第１図　塚原遺跡調査地位置図（1/6,000） …… 1
第２図　周辺周知遺跡分布図（1/25,000） …… 2
第３図　調査地周辺地形図（1/1,000） …… 3
第４図　調査地全体図（1/200） …… 3
第５図　基本土層図（1/40） …… 4
第６図　１号竪穴建物実測図（1/60） …… 4
第７図　１号竪穴建物出土遺物実測図（1/4） …… 4
第８図　２号竪穴建物実測図（1/60） …… 5
第９図　２号竪穴建物出土遺物実測図（1/4） …… 5
第10図　１号甕棺墓実測図（1/20） …… 6
第11図　１号甕棺実測図（1/6） …… 6
第12図　２号甕棺墓実測図（1/20） …… 6
第13図　２号甕棺実測図（1/6） …… 6
第14図　３号甕棺墓実測図（1/20） …… 6
第15図　３号甕棺実測図（1/6） …… 6
第16図　10号ピット実測図（1/40） …… 7
第17図　ピット出土遺物実測図（1/4） …… 8

本文写真目次

写真１　調査作業風景①
写真２　調査作業風景②
写真３　調査作業風景③
写真４　基本土層写真

表目次

第１表　出土土器観察表 …… 11
第２表　出土石器観察表 …… 11

写真１　調査作業風景①

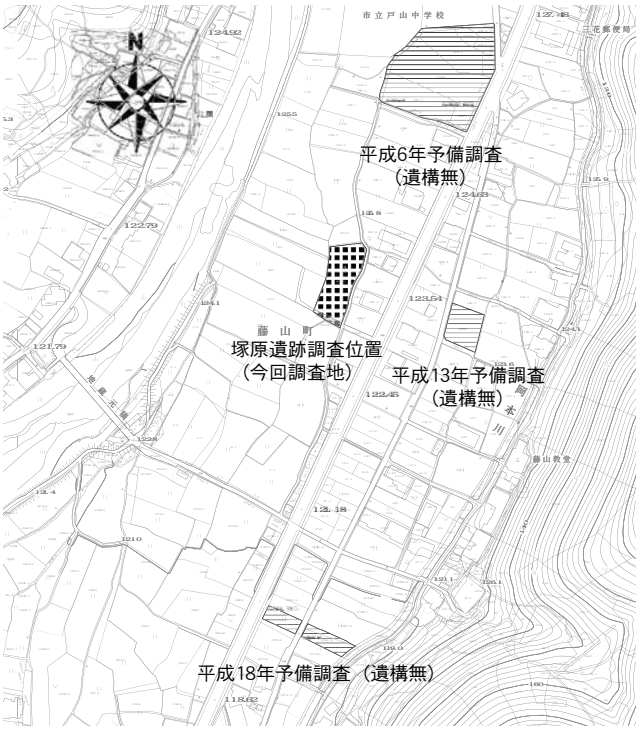
写真２　調査作業風景②

写真３　調査作業風景③

Ⅰ　調査に至る経過と組織

平成20年７月15日付けで有限会社宝珠開発より市教育委員会に日田市大字花月字塚原201-１ほか７筆で宅地分譲地造成工事に先立つ事前の照会文書（事前審査番号2008049）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里遺跡に該当しているものの、その周辺の予備調査の結果では、遺跡の所在は殆ど確認されていなかった。しかし、今回の開発対象区域が周辺沖積地でも比較的微高地にあるため、遺跡の所在の有無を確認しておく必要があるものと考えられた。そこで、工事の取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後の７月18日には予備調査依頼が提出され、これを受けて７月29日には重機を用いて予備調査を実施したところ、対象地に小児用甕棺墓などが発見され、遺跡の存在が確認された。

こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取り扱いについての協議を重ねたところ、予定地の造成は全面盛土工法にて行われるものの、造成地内に上下水道配管施設を伴う位置指定道路が設置されることから、この部分における遺跡の保存は困難であると判断し、農地転用許可後の10月に道路部分約260㎡の発掘調査を実施することとなった。そして、平成20年10月17日に事業主との委託契約を取り交わし、平成20年10月24日から12月３日の間発掘調査を実施した。その後、平成21年７月１日～８月20日の間整理作業を実施し、翌平成22年度に報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。



第１図　塚原遺跡調査地位置図（1/6,000）

10月24日　機械を用いて表土除去を開始する。
10月30日　遺構検出を開始する。
11月６日　西側より遺構の掘下げを開始する。
11月14日　遺構の実測を開始する。
11月28日　掘下げ・実測作業がほぼ完了する。
12月１日　空中写真撮影を実施する。
12月３日　調査を完了する。

なお、調査組織は次のとおりである。

平成20～22年度

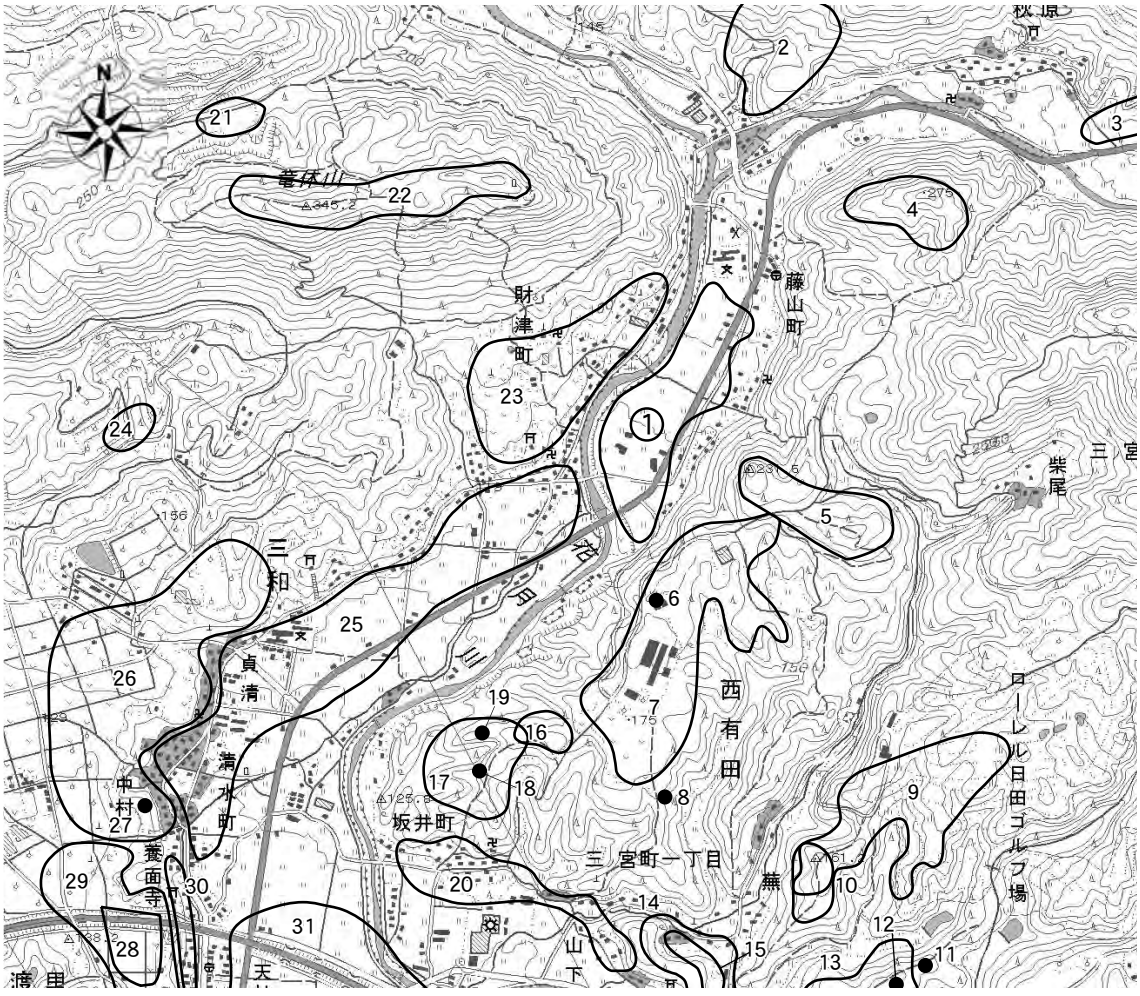
調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括　原田文利（教育庁文化財保護課課長〔～平成21年度〕）、財津隆之（同課長〔平成22年度〕）
調査事務　井上正一郎（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長〔平成20年度〕）
北村　羊（同主幹兼埋蔵文化財係長〔平成21年度〕）
土居和幸（同文化財保護課埋蔵文化財係長〔平成22年度〕）
田中正勝（同専門員〔平成20年度〕）河津美広（同専門員〔平成21年度〕）
中嶋美穂（同副主幹〔平成22年度〕）塚原美保（同主査）
調査員　今田秀樹（同主査）、行時桂子（同主査）、若杉竜太（同主査〔～平成21年度主任〕）
渡邉隆行（同主任【調査担当】）、矢羽田幸宏（同主事）、比嘉えりか（同嘱託〔平成20～21年度〕）
整理作業員　石松裕美、中原琴枝、平川優子、佐藤久美

Ⅱ　遺跡の立地と環境

塚原遺跡(1)は、日田市北東部を流れる花月川が小野川と合流する地点よりやや下方、標高約123mの沖積地に位置している。この一帯は、日田盆地へと流れ込む花月川の浸食作用によって、細長い谷地形を形成して北東側へと伸びており、ちょうど対象地の北側で二又に別れる谷の収束点に位置している。周辺には水田が比較的多く残っており、古くからの民家も見られるが、市街地に比較的近いこともあり、宅地造成やアパートなどの各種開発が徐々に増加する傾向にある。そのため、調査地周辺ではこれまで数度の予備調査（第１図）が実施されているものの、遺跡の所在は確認されていない。また、この一帯は当初「日田条里」の範疇に含まれていたが、今回の調査結果から、弥生時代の集落の存在が認められ、現在の周知遺跡名では誤解が生じるものと判断し、遺跡名称を「日田条里」から周辺の小字を採用して「塚原遺跡」へと変更する手続を行った。

さて、この塚原遺跡周辺の遺跡を概観すると、遺跡北側には中世日田の在地武士財津氏の居城があり、この一帯が財津氏の支配域であったと推測される。南西側の葛が原台地周辺には弥生時代中期前半代と古墳時代後期の集落跡である葛原遺跡、台地の南西端には縫ノ迫１・２号墳や坂本城跡が見られる。また、蕪谷川を挟んだ東側には、縄文時代の包含層と古墳時代中期から後期の鍛冶関連遺構や集落跡が確認された西有田赤ハゲ遺跡や在地武士団の蕪山城跡（石松城跡）が所在している。蕪谷川を下った周辺には弥生時代後期・古墳時代後期～古代の集落跡が確認された大行事遺跡や５世紀代の墳墓も見られる大行事横穴墓群、有田古墳などが見られる。

花月川を下った沖積地には弥生時代後期の環濠や古墳時代の集落跡、また古代の円面硯などが確認された三和教田遺跡、古墳時代初頭の竪穴遺構が確認された日田条里遺跡などが見られる。西側の山田原台地上には弥生時代の集落跡が見られる用松中村遺跡、弥生時代前期から後期の大規模集落跡である後迫遺跡、方墳と考えられる用松中村古墳、羽野横穴墓群などが所在している。



①塚原遺跡（376）
2.財津古城（藤山城跡)(039)
3.堂ノ前遺跡（041）
4.安全遺跡（042）
5.亀城遺跡（054）
6 .葛原古墳（055）
7.葛原遺跡（056）
8.寺坂古墳（057）
9.西有田赤ハゲ遺跡（062）
10.蕪山城跡（石松城跡)(245)
11.有田1号墳（065）
12.有田古墳（066）
13.上柳遺跡（067）
14.大行事遺跡（063）
15.大行事横穴墓群（237）
16.坂本城跡（原城跡)(243)
17.坂本古跡（060）
18.縫ノ迫1号墳（058）
19.縫ノ迫2号墳（059）
20.峰崎遺跡（061）
21.前ヶ尾遺跡（017）
22.龍ヶ鼻遺跡（龍ヶ鼻城跡）(018)
23.龍林寺遺跡（044）
24.草場野遺跡（020）
25.三和教田遺跡（231）
26.用松原遺跡（045）
27.用松中村古墳（046）
28.羽野砦跡（熊取城跡)(246)
29.後迫遺跡（048）
30.羽野横穴墓群（047）
31.日田条里（043）

※（番号）は周知遺跡番号

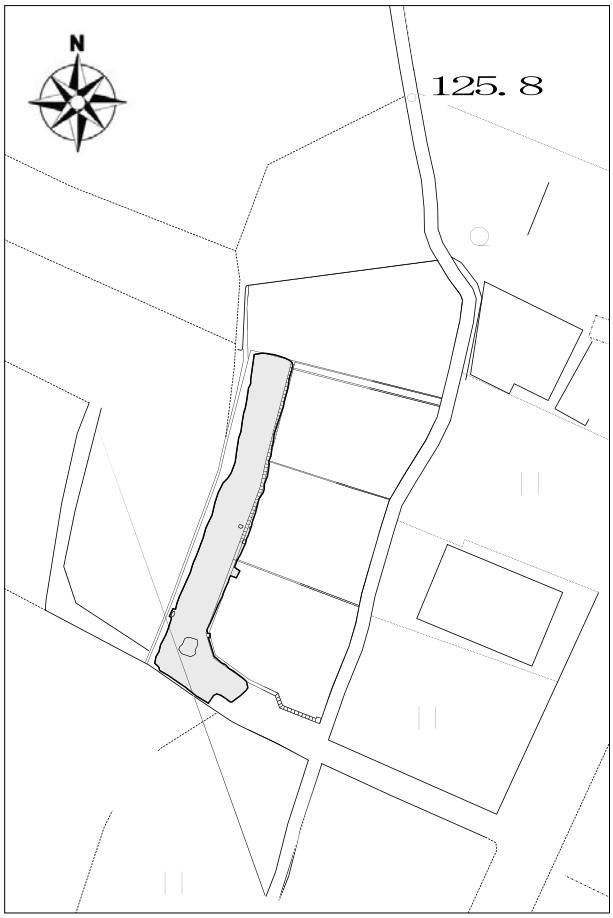
第２図　周辺周知遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査の記録

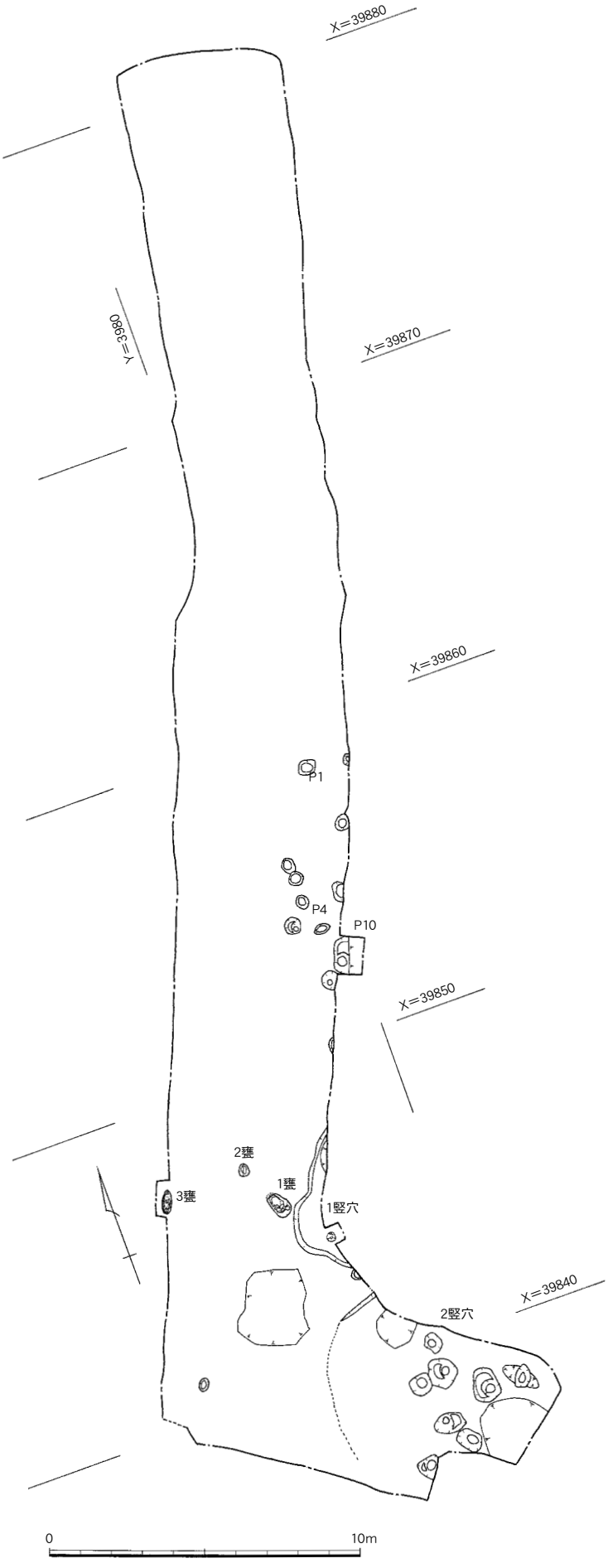
⑴　調査の概要（第３～５図）

調査は予備調査の結果を踏まえて、調査対象地北側より順次遺構検出面まで掘り下げてから遺構確認を行った。調査対象地は分譲住宅地造成予定地の中でも位置指定道路範囲に該当し、一部調査不可能範囲を除くと、幅約６ｍのＬ字形を呈し、東西長約44mで、南側のＬ字部分は長さ約13m、標高約123mで、面積は約260㎡を測る。地形面はほぼ平坦で、遺構検出面は淡黄色砂礫土の河川氾濫面であった。この地山面の大半は人頭大以上の大きさの礫で形成されており､部分的に砂層が見られる状況であった。遺構はこのうち比較的安定的な砂層が広がる南側部分などに多く見られたものの、一部には礫層部分にも掘り込んで形成されていた。

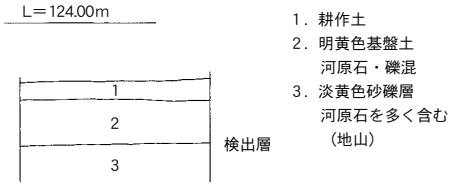
調査において検出された遺構は竪穴建物２軒、小児用甕棺墓３基、ピット多数であった。遺構埋土は黒褐色土であった。地山面の直上に



第３図　調査地周辺地形図（1/1,000）

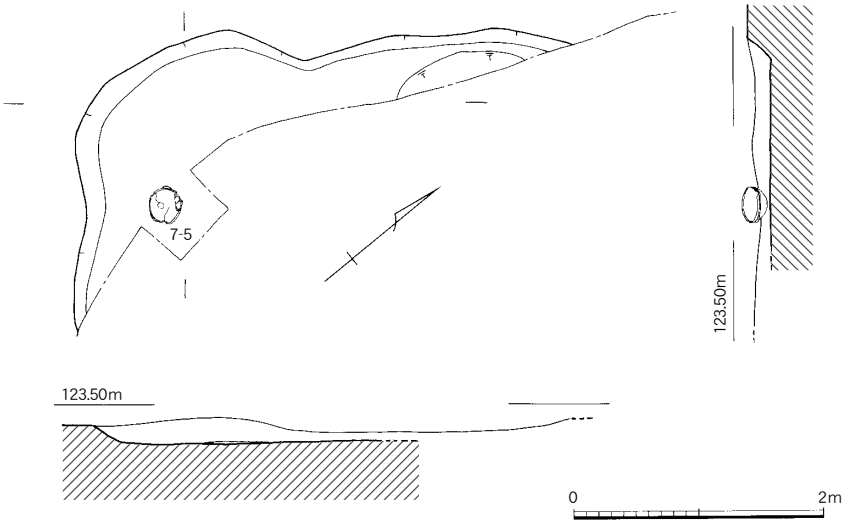


第４図　調査地全体図（1/200）

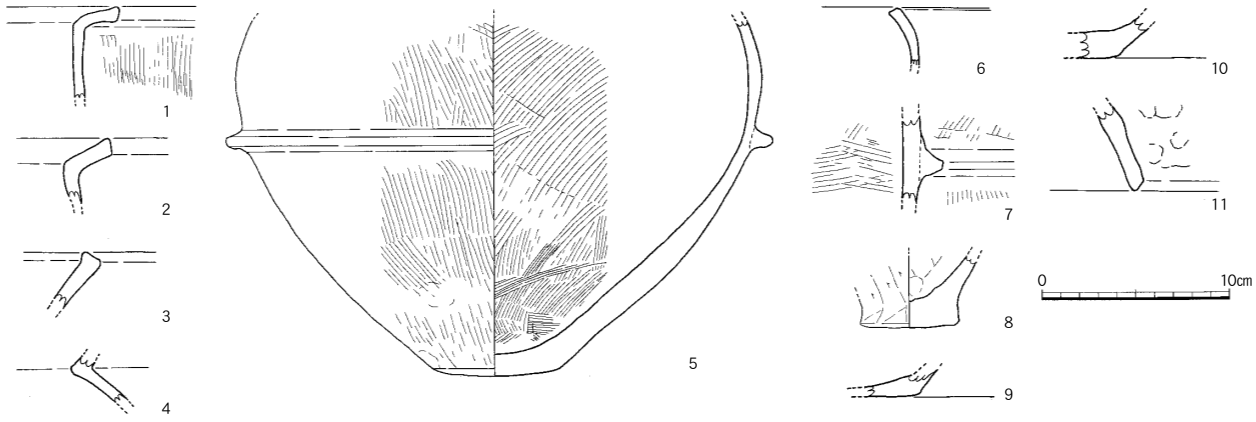


第５図　基本土層図（1/40）

写真４　基本土層写真



第６図　１号竪穴建物実測図（1/60）



第７図　１号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）

は現況水田基盤土が厚く堆積しており、水田造成のために地山面が大幅に削平を受けていたことが理解された。実際に、地山面に礫を埋め込んだと思われる箇所などが見られ、水田造成において邪魔と思われた礫類を処分したものと考えられる。

⑵　遺構と遺物

１．竪穴建物

全部で２基の住居が確認され、この一帯に複数の住居が重複していることが認められる。また、１号は方形・２号は円形で両者に一定の時期の違いも想定された。

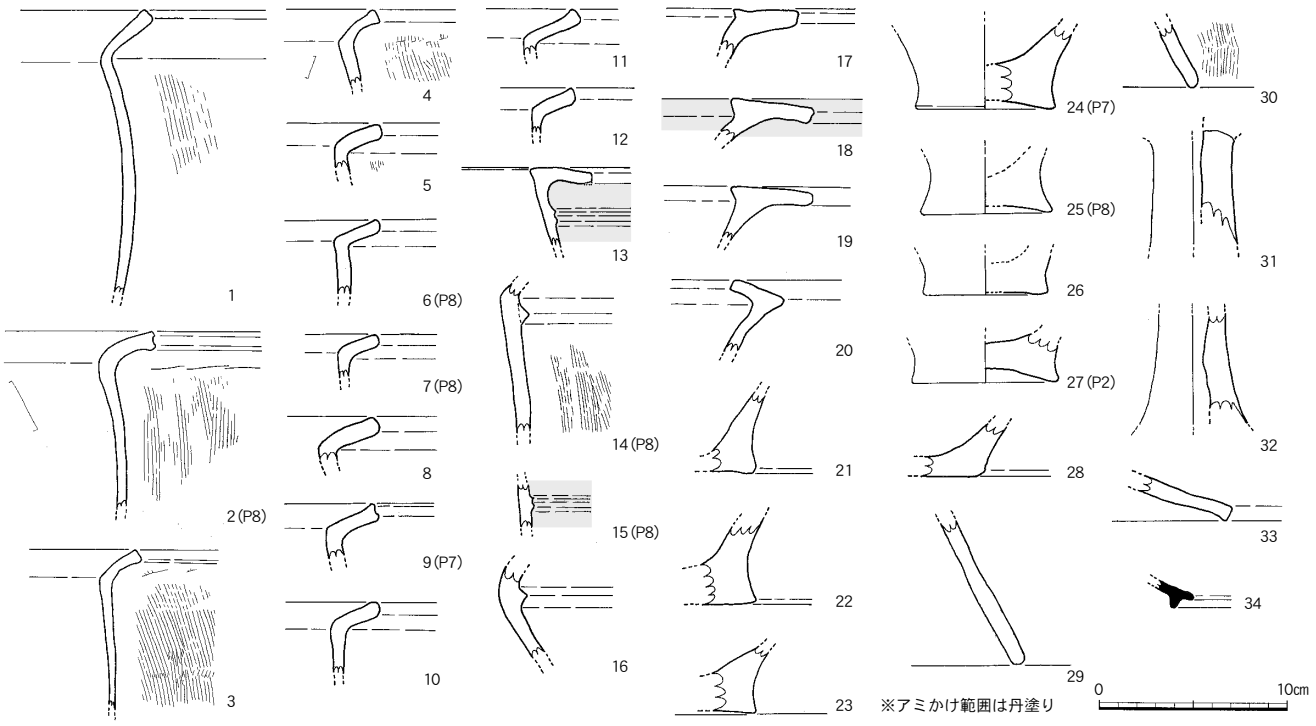
１号竪穴建物（第６図、図版３）

調査地南側のＬ字部分に位置し、遺構の大半が調査地外に広がっているため、検出できたのは竪穴のコーナー部分のみである。検出面での規模は、南北約４m、東西約2.4mを測り、検出面からの深さは約20㎝を測る。方形プランの竪穴建物と想定されるものの、柱穴及び炉は検出出来なかった。そのほか調査地南西側には胴部が破損した壺の底部が認められた。

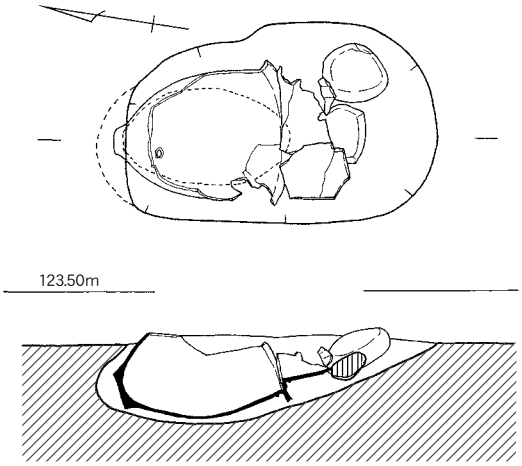
出土遺物（第７図、図版４）

１から３は弥生土器甕である。いずれも口縁端部を跳ね上げており、３はやや口縁角が高い。４・５は弥生土

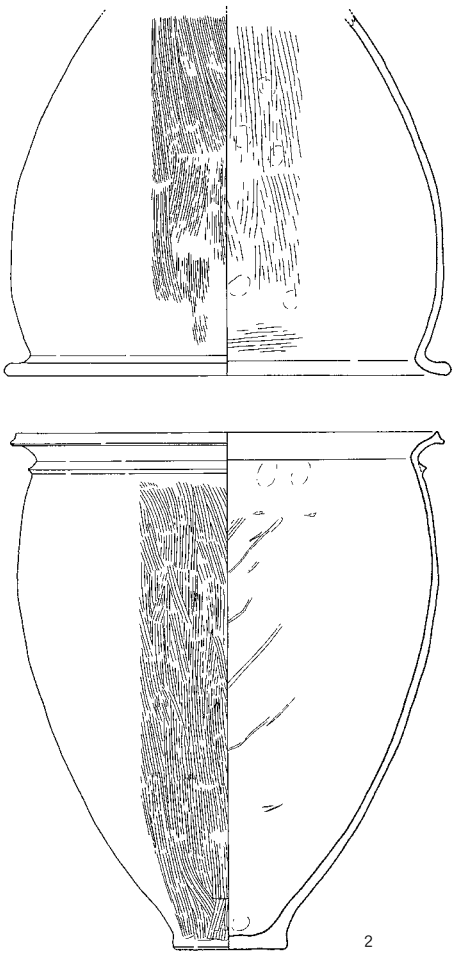
第８図　２号竪穴建物実測図（1/60）



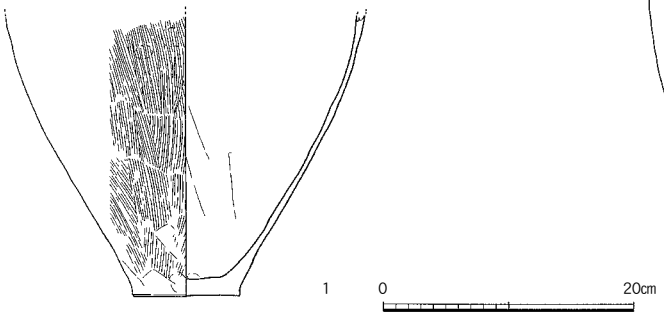
第９図　２号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）



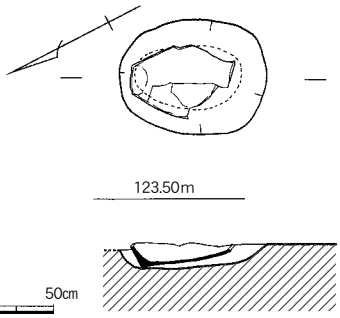
第10図　１号甕棺墓実測図（1/20）



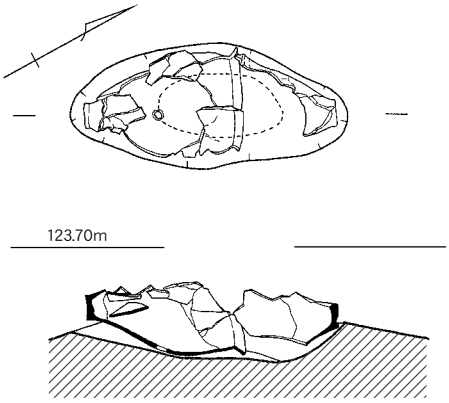
第11図　１号甕棺実測図（1/6）



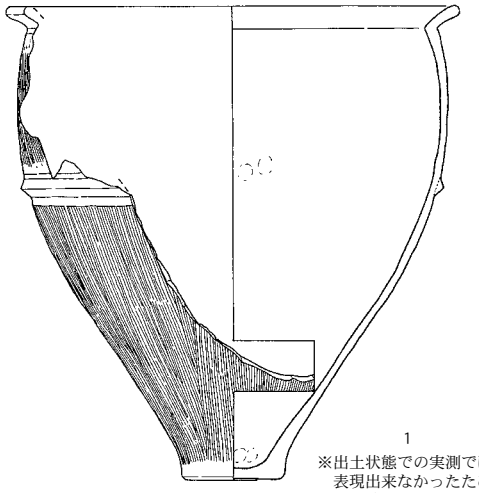
第13図　２号甕棺実測図（1/6）



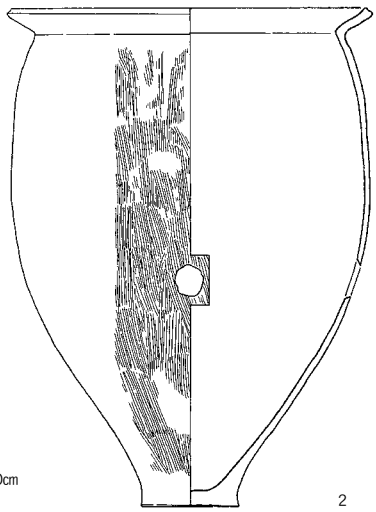
第12図　２号甕棺墓実測図（1/20）



第14図　３号甕棺墓実測図（1/20）



※出土状態での実測では、外面打欠が表現出来なかったため、上下反転して搭載している。



第15図　３号甕棺実測図（1/6）

器壺である。５は胴部に１条の突帯を巡らせ、内外ともに荒い刷毛目が施されている。外部は部分的にナデ消している。底部は平底であるが、底面がやや膨らみ端部の作りが甘く、レンズ状に膨れる。６は弥生土器の袋状口縁壺か。７は弥生土器甕の胴部突帯である。やや大型の甕か。突帯は断面台形状で内外共に刷毛目が施される。８は小型の弥生土器甕の底部である。９・10は弥生土器壺の底部である。11は弥生土器器台の脚部か。指頭圧痕が見られる。

２号竪穴建物（第８図、図版３）

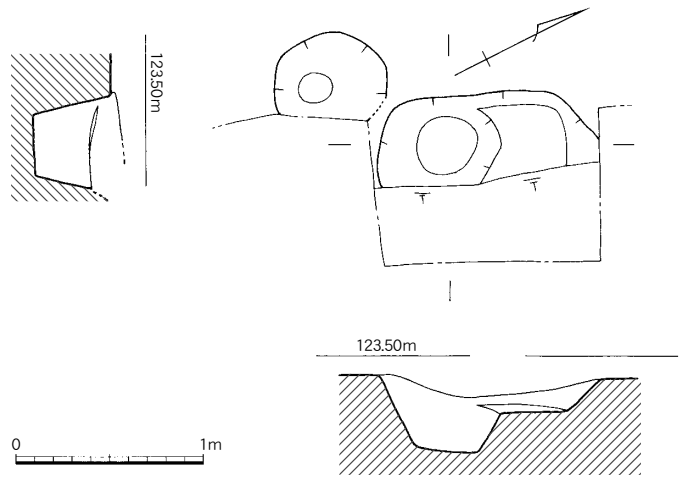
調査地南端に位置しており、大半が調査地外に広がっている。また、上面の削平が著しいため全体プランの把握が非常に困難であったが、検出時に遺構埋土と考えられる黒褐色土の広がりが円形状に確認されたことから、この範囲が円形住居の範囲と判断した。（第８図点線部分）この住居内の床面は礫層によって形成されており、部分的に礫を埋め込んだカクランが見られることから、検出された床面はフラットな面が少なく、本来の床面を残していない可能性がある。また、出土遺物も床面直上から検出されるものはなく、大半が埋土に混在する小破片であった。明確な遺構プランの把握や床面の把握が困難であったために、遺構埋土に撹乱部の遺物が混在した可能性がある。

検出面の規模は東西約７ｍ以上、南北約6.8m以上となる。床面で検出されたピットは８基を数え、主に直径70～90㎝、深さ約40～50㎝を測りやや大型である。そのうち西側に巡る５基のピット（Ｐ３～７）が円形状に巡っていることから、これらが主柱穴となる可能性が考えられ、また幾つか重複していることから建替えの可能性も考慮する必要がある。しかし、どのピットが主柱穴となるかは全体配置が不明であるため、断定はしていない。今回炉跡や中央土坑は確認されず、焼土や炭は確認されなかった。

出土遺物（第９図、図版４）

27はＰ２、９・24はＰ７、２・６・７・14・15・25はＰ８から出土した。

１から15は弥生土器甕である。このうち１～12は「く」の字状の口縁部を形成し、２は端部をやや凹ませ、９・11は端部を跳ね上げている。１～４では刷毛目が外面に残されている。胴部の張りはあまり見られない。13は鋤先状口縁を呈する甕で、外面に丹塗りが施される。口縁部は垂れ下がり、頸部下にM字状突帯が巡っている。14は甕の胴部で、頸部直下に突帯が巡る。15は甕の胴部で外面に丹塗りが施され、M字状突帯が巡る。16は弥生土器壺の頸部か。頸部に断面三角形状の突帯が巡る。17～20は弥生土器壺の口縁部である。17～19は鋤先状口縁を呈する壺で、うち18は内外に丹塗りが施される。20は二重口縁壺で擬口縁部は鋭角に曲がる。21から27は弥生土器甕の底部である。いずれもやや厚手の平底で、24～27は僅かに上底上状を呈している。28は弥生土器壺の底部か。平底を呈する。29・30は弥生土器器台の脚部である。30は外部に刷毛目が施される。31・32は弥生土器高坏の脚部である。33は弥生土器高坏脚部の端部か。34は須恵器の坏蓋の口縁端部である。逆刺が浅く嘴状に小さく開いている。

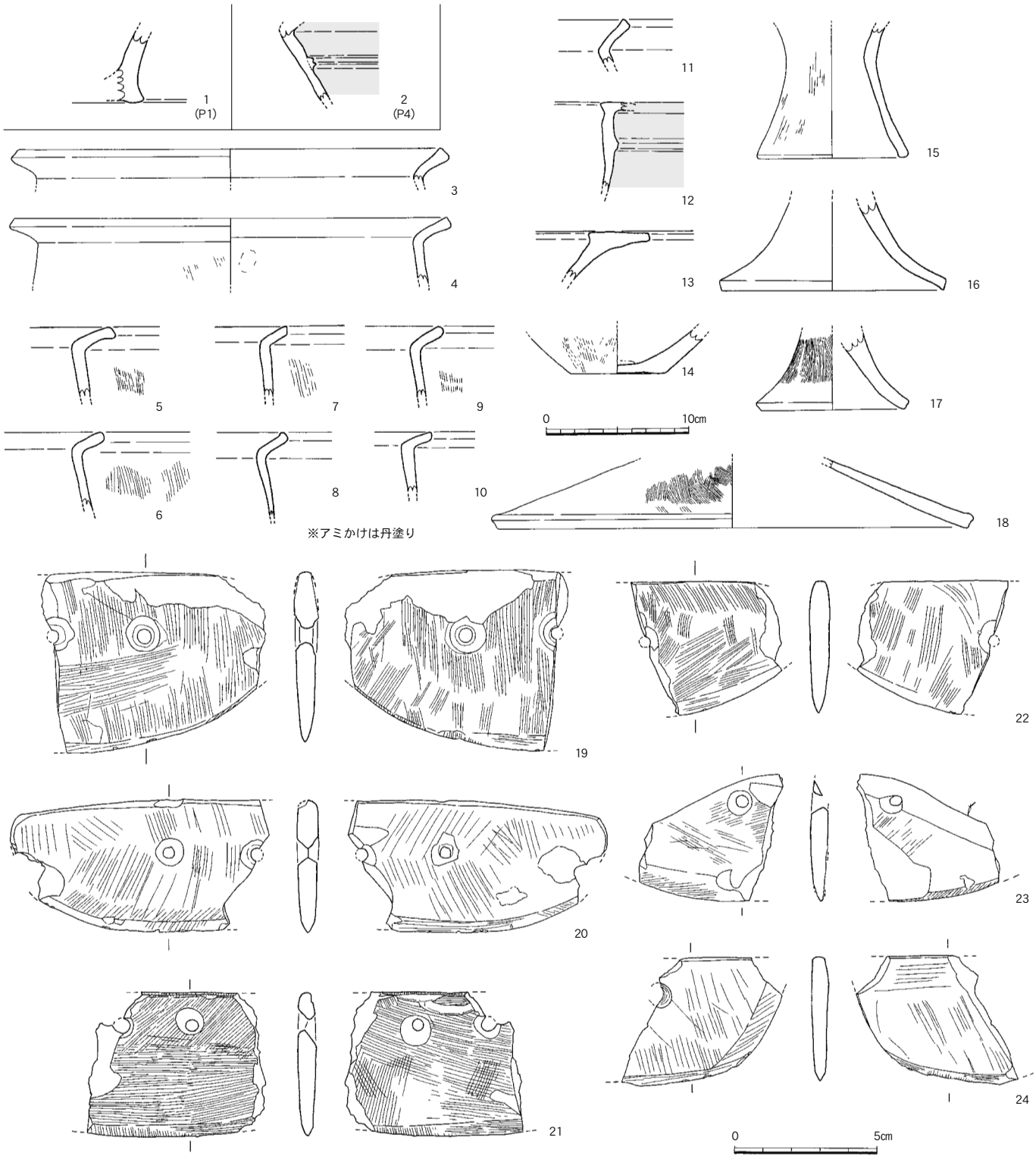


第16図　10号ピット実測図（1/40）

大半の遺物が弥生中期末に収まるものと考えられるのに対して20、34はそれぞれ弥生後期中頃から後半、７世紀代の所産と見られ、明らかに時代が異なっている。これらの遺物は撹乱層遺物の混入と判断される。

２．甕棺墓

調査地内から３基の甕棺墓が確認された。



第17図　ピット出土遺物実測図（1/4）

いずれも小型であることから、小児用と判断される。また、埋置角度や土器型式の違いから概ね２時期に分かれて埋葬されたものと考えられる。（方位角は北を０°、東を90°、南を180°、西を270°で表現する。）

１号甕棺墓（第10・11図、図版３・５）

調査地南側に位置し、１号竪穴建物に近接している。上面は削平を受けているものの、比較的残存状況は良好である。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北長約80㎝、東西幅約50㎝、深さ約20㎝を測る。下甕は地山を10㎝ほど掘り窪めて設置し、上甕の下部には埋置角度の調整のために礫を数個挿入していた。埋置角度は

約15度、主軸は171°を呈する。

第11図１は上甕で、口縁部はくの字状に屈曲し端部は丸みを帯びる。胴部下半は削平のため欠損している。外面にはやや目の細かい縦刷毛目、内面には粗い目の刷毛目が残される。第11図２は下甕で、口縁部はくの字状に屈曲し端部をやや跳ね上げ、頸部やや下部に断面三角形の突帯が巡る。胴部から底部にかけてやや張出し、底部は平底を呈する。外面には細かな刷毛目が施され、内面にはヘラ状ナデ痕跡が残る。

２号甕棺墓（第12・13図、図版３・５）

調査地南側に位置し、１号甕棺に近接している。上面大半が削平を受けており、単棺或は下甕の底部付近が残存しているのみである。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北長約40㎝、東西幅約30㎝、深さ約５㎝を測る。埋置角度は不明だが、主軸は202°を呈する。

第13図１は甕で、底部は平底を呈し、外面には刷毛目が施される。

３号甕棺墓（第14・15図、図版４・５）

調査地南西側に位置している。上面は削平を受けており、墓壙掘方は殆ど残存していない。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北長約70㎝、東西幅約30㎝、深さ約15㎝を測る。下甕にはほぼ完形の土器を使用しており、下面には穿孔が施されている。上甕は上部は削平を受けているものの、下面は意図的に打ち欠かれている。土器側面を打ち欠いて下面は地山成形のまま利用するという特殊な形状を呈している。埋置角度は約０度を呈し、主軸は27°を呈する。

第15図１は上甕で、口縁部はくの字状に屈曲し、胴部やや上位に断面三角形の突帯が巡る。底部は平底を呈する。表面は削平のため残存しておらず、打ち欠き範囲は不明瞭であるが、甕の片面を大きく打ち欠いていたものと考えられる。外面には細かい刷毛目が残り、内面はナデ消されている。第15図２は下甕で、口縁部はくの字状に屈曲している。胴部はやや張出すものの、底部にかけて窄まり底部は平底を呈する。外面は刷毛目が施され、内面はナデ消されている。胴部下半に穿孔が見られる。

３．ピット

全部で14基が確認され、うち遺物が出土したのはＰ１とＰ４、P10である。なかでもP10は多量の遺物が出土しており、廃棄土坑等の可能性が考えられる。ピットの出土遺物は一括で説明し、P10は個別に説明を行う。

10号ピット（第16図、図版４）

調査地中央よりやや南側から出土した土坑で、調査地外へと広がっており、東側の大半が巨大な礫で撹乱を受けている。確認面での規模は長さ約100㎝、幅約50㎝以上、深さ約40㎝を測り、不整方形を呈している。この狭いピット中に多量の土器などが廃棄され、特に石庖丁の破片が多いことが特徴的である。このことから、廃棄土坑等の可能性が考えられる。また、この遺構から出土した石庖丁（第17図19）破片が１号竪穴建物出土の破片と接合したことから、両者の廃棄土埋没はほぼ同時期の可能性が推測される。

ピット出土遺物（第17図、図版５）

ピットから出土した遺物をまとめて報告する。

１はＰ１から出土した弥生土器甕の底部である。

２はＰ４から出土した弥生土器壺の頸部である。頸部下面にM字状突帯を貼付け、丹塗りが施される。

３から24はＰ10から出土した。３から12は弥生土器甕である。３から９は口縁部形態が「く」の字状をなしており、３・８・11は口縁端部をツマミあげている。12は鋤先状口縁をなす弥生土器甕である。頸部下部にM字状突帯が巡り、外面には丹塗りが施される。13・14は弥生土器壺である。13は鋤先状口縁部をなす壺の口縁部である。14は壺の底部で、外に開く。15は弥生土器器台である。外面には刷毛目が施されている。16は弥生土器高坏の脚部である。17は弥生土器台付き甕の脚部である。外面にハケ目が丁寧に施される。18は弥生土器

蓋である。外面は細かな刷毛目が部分的に残る。

19から24は石庖丁である。いずれも口縁部に僅かな欠けが見られ、使用痕と思われる。どれも細かく破損していることから、かなり使用されたものと想定される。石材は23が片岩で、それ以外は輝緑凝灰岩と思われる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、竪穴建物２棟、甕棺墓３基、ピット14基が確認された。

まず、これらの遺構の時期について比定する。１号竪穴建物は第７図５のややレンズ底を呈している壺が床面直上より出土しており、比定の根拠となる。しかし、口縁部が残存しないことやその他の器種が乏しいことから、明確な時期比定は困難と判断し、概ね高三瀦式新段階から下大隈式古段階に収まると考えた。次に２号竪穴建物は、一部混入が見られるものの、鋤先状口縁部を有する甕や壺・甕の胴部・底部形態の特徴から、概ね須玖式Ⅱ式古段階～新段階に収まると判断した。１号甕棺墓は胴部から底部にかけての張り出しの特徴から高三瀦式古段階、２号甕棺墓は須玖Ⅱ式、３号甕棺墓は須玖Ⅱ式古段階と想定した。ピット10から出土した土器はその特徴から、概ね２号建物と同じ須玖Ⅱ式古段階から新段階に収まるものと考えたいが、１号建物出土の石庖丁とピット10出土の石庖丁が接合したことを考慮すると、埋没はやや下って高三瀦新段階から下大隈古段階と捉えておきたい。

さて、以上の時期比定から、須玖Ⅱ式古段階から新段階、高三瀦式古段階、高三瀦式新段階から下大隈古段階の３時期程度が想定され、概ね弥生中期後半から後期前半までの期間に該当するものと考えられる。したがって、各遺構の変遷を想定すると以下のとおりである。

集落としての初現は中期後半段階からで、２・３号甕棺墓が中期後半段階に埋設され、ほぼ同時期かやや新しい時期の中期末にかけて２号竪穴建物が埋没したものと想定される。つづいて１号甕棺墓が後期初頭頃に埋設された後、後期前半から中頃にかけて１号竪穴建物及びピット10が埋没し、弥生期の集落の利用は停止するものと予測される。したがって、この期間の集落が調査地周辺にも広がっているものと考えられるが、切り合い等も少ないことから、その密度は低いものと予測される。このように弥生期の集落状況が予測されるのであるが、混入遺物で７世紀代の須恵器破片が見つかっており、古代の集落が周辺に所在する可能性もあり、今後の調査が期待される。

今回の調査では、これまで明らかにされてこなかった花月川上流域の弥生集落の様相の一端が明らかとなった。日田盆地においては、弥生時代中期後半から末にかけて盆地内の矮小な谷部にまで集落が進出するようになり、それらの集落は後期中頃までには廃絶されるなどの特徴が知られるが、今回確認された塚原遺跡の集落動向は、この特徴に一致している。これまで確認されていなかった花月川流域でも同様の現象が確認されたことは、中期後半の遺跡の拡散現象が日田盆地内のあらゆる河川流域に至っていた可能性が高いものと想定される。

また、花月川流域は日田盆地を抜けて、豊前方面へと抜けるルートにあたる。近世では日田往還として四日市・中津城へと至る官道として機能していた。古代と近世で同じルートが道として利用されていたかどうかは推測の域を出ないが、河川氾濫の影響が大きく、地山に巨大な礫が多い不利な地形をわざわざ選んで集落を営んでいる日田盆地東奥の弥生集落の存在は、豊前地域との交流も想起させるものである。現時点では遺跡の規模や継続期間など不明な点が多いが、今後の調査の進展によって、この地域の集落動態が明らかになるものと期待したい。

【参考文献】

渡邉隆行　2009　「日田地域における弥生集落の動向」『平成21年度九州史学会考古学部会発表資料』
常松幹雄　1991　「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
平尾和久　2001　「浮羽郡内における弥生時代後期の土器について」『仁右衛門畑遺跡Ⅱ下巻』福岡県教育委員会
平　佳典　2004　「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」
「第53回埋蔵文化財研究集会－弥生中期土器の併行関係－発表要旨」埋蔵文化財研究会

第１表　出土土器観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	法　量			調　整		胎土	焼成	色　調				備　考
					口径	底径	器高	内面	外面			外面	マンセル表色	内面	マンセル表色	
7	1	1号竪穴	弥生	甕	－	－	(4.9)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・刷毛目	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	外面にスス付着
7	2	1号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	
7	3	1号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
7	4	1号竪穴	弥生	壺	-	-	-	ナデ	-	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
7	5	1号竪穴	弥生	甕	－	6.7	(18.9)	刷毛目	刷毛目・ヨコナデ・指頭圧痕	A・C・E・H	良好	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	外面に黒斑有り
7	6	1号竪穴	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
7	7	1号竪穴	弥生	甕	－	－	(4.7)	刷毛目	刷毛目・ヨコナデ	B・C・D・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
7	8	1号竪穴	弥生	甕	－	5.2	(3.8)	ナデ・指頭圧痕	ケズリ	A・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
7	9	1号竪穴	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C・E	良好	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	
7	10	1号竪穴	弥生	壺	-	-	-	指オサエ	ナデ	A・D・E	良好	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	
7	11	1号竪穴	弥生	器台	-	-	-	ナデ	指頭圧痕	B・C・D	良好	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	
9	1	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	刷毛目	A・B・C・D	良好	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	
9	2	2号竪穴P8	弥生	甕	－	－	(9.3)	ヨコナデ・ナデ（工具痕）	ヨコナデ・刷毛目	A・C・D・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	3	2号竪穴	弥生	甕	－	－	(8.5)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・刷毛目	A・C・E	良好	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR7/4	
9	4	2号竪穴	弥生	甕	－	－	(4.0)	ヨコナデ・ナデ（工具痕）	ヨコナデ・刷毛目	A・C・D・E	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	橙	7.5YR7/6	
9	5	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	刷毛目	B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	6	2号竪穴P8	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
9	7	2号竪穴P8	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	8	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	9	2号竪穴P7	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	C・D・E	良好	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	
9	10	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	7.5YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR7/3	
9	11	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・E	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
9	12	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	C	良好	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	
9	13	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ミガキ？丹塗	A・B・C	良好	明赤褐	2.5YR5/8	浅黄橙	10YR8/3	
9	14	2号竪穴P8	弥生	甕	-	-	-	刷毛目	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	15	2号竪穴P8	弥生	甕	-	-	-	ナデ	丹塗	A	良好	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	
9	16	2号竪穴	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	
9	17	2号竪穴	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C・D	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	18	2号竪穴	弥生	壺	-	-	-	-	ナデ	A・B・C	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	
9	19	2号竪穴	弥生	壺	-	-	-	丹塗	丹塗	A・B・C	良好	明黄橙	10YR7/6	明黄橙	10YR7/6	丹塗（赤　10R4/6）
9	20	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C・D・E	良好	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	
9	21	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	22	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	23	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	C	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	
9	24	2号竪穴P7	弥生	甕	-	(7.4)	-	ナデ	ナデ	A・C・D	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	
9	25	2号竪穴P8	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	A・C	良好	にぶい橙	5YR6/3	にぶい橙	5YR6/3	
9	26	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	B・C・D	良好	にぶい橙	5YR7/3	にぶい橙	5YR7/3	
9	27	2号竪穴P2	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	28	2号竪穴	弥生	甕	-	-	-	指オサエ	ナデ	A・C	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	
9	29	2号竪穴	弥生	器台	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	30	2号竪穴	弥生	器台	-	-	-	ナデ	刷毛	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	31	2号竪穴	弥生	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	
9	32	2号竪穴	弥生	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B	良好	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	
9	33	2号竪穴	弥生	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
9	34	2号竪穴	須恵器	坏蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	黄灰	2.5Y6/3	黄灰	2.5Y6/3	
11	1	1号甕棺	弥生	上甕	(35.0)	－	(28.6)	刷毛目・指頭圧痕・ナデ・ヨコナデ	刷毛目・ヨコナデ	B・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	浅黄橙	10YR8/3	
11	2	1号甕棺	弥生	下甕	(33.4)	8.6	41.2	ヨコナデ・指頭圧痕・ナデ（工具痕）	ヨコナデ・刷毛目・ナデ	A・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	外面に黒斑有り
13	1	2号甕棺	弥生	甕	－	(8.4)	(22.3)	ナデ・工具痕・指頭圧痕	指頭圧痕・刷毛目・工具ナデ	A・C・D・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
15	1	3号甕棺	弥生	上甕	(35.4)	7.2	37.7	ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・刷毛目・ナデ	A・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	胴部打ち欠き、外面に黒斑有り
15	2	3号甕棺	弥生	下甕	(28.0)	7.6	39.7	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・刷毛目	A・C・E	良好	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	穿孔有り、外面にスス付着
17	1	P1	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	2	P4	弥生	壺	-	-	-	ナデ	丹塗	A・C・D	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	
17	3	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	4	P10	弥生	甕	(30.2)	－	(4.7)	ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕	ヨコナデ・刷毛目・ナデ	A・C・D	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	5	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	刷毛目	A・B・C	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
17	6	P10	弥生	甕	－	－	(5.5)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・刷毛目	A・B・C	良好	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	10YR3/1	
17	7	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	刷毛目	A・C	良好	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	
17	8	P10	弥生	甕	-	-	-	-	-	A・C・D	良好	にぶい黄橙	7.5YR7/3	にぶい黄橙	7.5YR7/3	
17	9	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	刷毛目	A・C	良好	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	
17	10	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A・B・C・D	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
17	11	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	C	良好	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	
17	12	P10	弥生	甕	-	-	-	ナデ	丹塗	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	丹塗（赤　10R4/6）
17	13	P10	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
17	14	P10	弥生	壺	-	(6.5)	-	ナデ	刷毛目・ナデ	C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	15	P10	弥生	器台	－	(10.2)	(9.1)	ナデ	刷毛目・ナデ	A・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	16	P10	弥生	高坏	-	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	17	P10	弥生	台付甕(脚部)	－	(10.0)	(5.3)	ナデ・ヨコナデ	刷毛目・ヨコナデ	A・C・E	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
17	18	P10	弥生	蓋	(32.8)	－	(4.7)	ナデ・ヨコナデ	刷毛目・ヨコナデ	A・B・C・E	良好	灰黄褐	10YR6/2	褐灰	10YR5/1	

第２表　出土石器観察表

図版	番号	遺構名	種別	器種	法　量（cm）			重さ	材質	備　考
					最大長	最大幅	最大厚			
17	19	1住・P10	石器	石庖丁	(6.3)	(7.9)	0.8	56.5	輝緑凝灰岩	破片同士が1竪穴とP10で接合
17	20	P10	石器	石庖丁	(4.6)	(9.0)	0.7	38.1	輝緑凝灰岩	
17	21	P10	石器	石庖丁	(5.0)	(6.3)	0.7	36.2	輝緑凝灰岩	
17	22	P10	石器	石庖丁	(4.7)	(5.2)	0.7	27.5	輝緑凝灰岩	
17	23	P10	石器	石庖丁	(4.4)	(5.0)	(0.6)	14.3	片岩	
17	24	P10	石器	石庖丁	(4.5)	(5.6)	0.6	19.7	輝緑凝灰岩	

法量の単位はcm。（）書きは、残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

調査地遠景（日田盆地を望む）

調査地遠景（南から）

写真図版 2

調査地全景（真上から）

南側遺構群（真上から）

① 1 号竪穴建物（西から）

② 1 号竪穴建物（東から）

③ 1 号竪穴建物遺物出土状況

④ 2 号竪穴建物（西から）

⑤ 2 号竪穴建物（東から）

⑥ 1 号甕棺墓確認状況

⑦ 1 号甕棺墓完掘状況

⑧ 2 号甕棺墓完掘状況

写真図版４

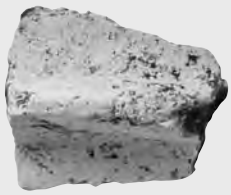
①３号甕棺墓完掘状況（東から）

②３号甕棺墓完掘状況（南から）

③10号ピット（東から）

7-1

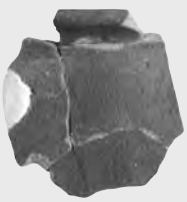
7-5



7-7

7-8

9-2



9-3

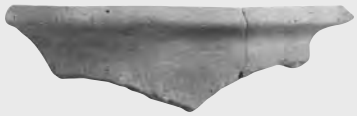
9-4

※写真に付している番号は挿図番号に一致する。

11-1

11-2

13-1


17-4

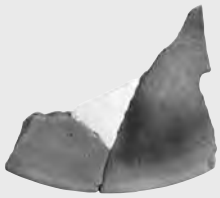
17-6

14-1

14-2

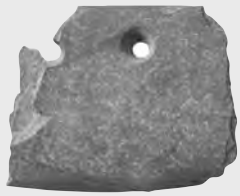
17-15

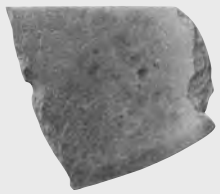
17-17


17-18

17-19

17-20


17-21


17-22

17-23

17-24

※写真に付している番号は挿図番号に一致する。

報　告　書　抄　録

ふりがな	つかはらいせき
書名	塚原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第97集
編著者名	渡邉　隆行
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島２-６-１
発行年月日	2011年２月28日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
塚原遺跡	大分県日田市 大字花月字塚原 201-1ほか	44204-6	204376	33°21′34″	130°57′26″	20081024 ～ 20081203	260㎡	宅地分譲地 造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚原遺跡	集落	弥生	竪穴建物、甕棺墓、ピット	弥生土器、石庖丁	

要約	塚原遺跡は花月川上流部の小野川との合流地点よりやや下方、標高約123mの小高い沖積地に位置している。対象となる分譲住宅地造成工事区域のうち、位置指定道路部分の調査を実施した。調査の結果、花月川の氾濫によって形成された礫混じりの沖積層を掘り込む弥生時代中期後半～後期の円形と方形の竪穴建物２軒、甕棺墓３基、ピット多数が確認された。今回の調査結果から、これまで未発見であった花月川上流における弥生集落の様相を知る貴重な成果を得ることが出来た。また、花月川流域でも最も北東側に位置しており、日田盆地における弥生集落の展開を検討するうえで重要な発見であるといえる。

塚原遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第97集

2011年２月28日

編　集　　日田市教育庁文化財保護課

〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1

発　行　　日田市教育委員会

〒877-8601　大分県日田市田島２-６-１

印　刷　　尾花印刷有限会社

〒877-0026　大分県日田市田島本町８-８

日田市

PRINTED WITH SOY INK